
うし

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うし

【Nコード】

N4075P

【作者名】

鹿の子

【あらすじ】

彼女と僕の物語。

幸せの形は、他人からは見えない。自サイトでも公開中。

「そんな、食べてすぐに横になったら、」

「『牛』になる、だろ？」

彼女からの、決まり文句なお小言を、僕は背中中で聞いていた。

僕の背中の中の向こうには、ペタンと床に座ってのんびりとラーメンを食べている彼女がいた。

マンションの七階には、縁側なんてあるわけなくて、フローリングの床に垂直にはめ込まれた大きなガラス窓が、外の世界を映していた。

秋の昼間の温かな日差しが、満腹満足な僕の顔を眩しいくらいにテカテカと照らしている。

最近少し『出てきた』なんていわれるお腹のあたりも、同じようにテカテカと照らしている。

部屋の中は、お世辞にもロマンチックとはいいいがたい、醤油の匂い。

今日のラーメンには、朝の残りのウインナーと野菜が入っていた。

ラーメンにウインナー。

意外とこれがいけるんだなあ。

ホント、美味かった。

よく磨かれた窓の外には、灰色の道路が上下に走っていて、否が応でも僕らが都会で暮していることを示していた。

色気もクソもない、安らぎも優しさもない、黒でもなくて白でもない、そんな煤汚れた曖昧な景色だった。

そして、僕たち二人の関係はというと、これまた酷く曖昧で、言葉にしようとしても上手くナニカに、当て嵌めることのできないものだった。

言葉にすると、恐らく、ワイドショーが喜びそうな酷くみだらな

関係になってしまうのだと思う。

なのに、この温かさは、静けさは、満ち足りた気持は、なんだろう？

幸福という言葉以外のどんな言葉で表せるというのだろうか？

そう思うと、言葉で表せる人と人の繋がりの方が、かえって薄いものなのかもしれない、なんて思えてくる。

だから言葉で必至に繋ぎとめ、形としようとするのかもしれない。

「ねえ。また、なんかこ難しい、へ理屈でも考えているんでしょ」
にゅっと彼女が僕を覗き込んだ。

お互い、もうそう若くない2人だった。

「お日様にずっと顔を向けていると、シミができちゃうんだから」
彼女が笑う。

「今更シミの一つや二つくらい」

それよりも気になるお腹をポンポンと叩く。

「牛じゃなくて、タヌキだね」

彼女が笑いながら二人分の器を下げた。

「あっ、珈琲は僕が入れるから」

彼女が振向きながらほほ笑んだ。

明日からまた、僕たち二人だけじゃない世界との一週間が始まる。

それは、それで悪くない事なんだけど。

たまに、どうしようもなく息が詰まりそうになってしまいうことがある。

「当たり前前の幸せ」ってお札を、厄除けの様にペタペタと貼られてしまう息苦しさにめげてしまいそうになることがある。

だから、日曜の午後のこんな日のこんな瞬間に。

柄にもなく『愛』ってヤツの存在にすがりたくなってしまうんだな、僕も。

「豆を出しとくね」

そう言いながら、カウンターに缶を置く彼女と。

あとどれくらい、僕は同じ時が過ごせるのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4075p/>

うし

2011年10月8日12時25分発行